

大山町農協では、地元農家の作物や加工品を直接、消費者に販売する直売所「木の花ガルテン」を90年に開店した。ケース単位で出荷しなければ流通に乗らない通常の販売経路とは異なり、ガルテンではわずかな量の作物でも販売できる。「自分で作ったものが自分で付けた値段で売れることは、生産者にとっては喜びであり、新し

人と地域を育てるために 都会との交流を促進

大山町の取り組みは、その後、大分県全体で「一村一品運動」として展開され、一躍有名になった。今ではJICA研修事業、技術協力プロジェクト、青年海外協力隊などを通じて、世界中の途上国の地域振興活動として広がっている。海外に赴任する協力隊員などの研修も担当している矢幡建治さんは、「よその人の意見を参考に、自分たちの町の良いものに気が付き、それを発信していくことが、一村一品運動の基本です」と話す。

か。1962年、大山町農協の組合長だった矢幡治美さんが提案したのは、土地に合った特産物の創出だった。「梅栗植えてハワイに行こう」のスローガンの下、斜面での生育に向き、商品単価も高い梅や栗、スモモなどの果樹育成を奨励し、農家の収入向上を実現した。



梅干しは、梅を加工して付加価値を付けたもの。大山町農協の戦略の原点だ

「木の花ガルテン」の直売所には、大山町の農家が作るさまざまな品物が並んでいる



切り立った山に挟まれた谷間の小さな農村、大分県日田市大山町。大規模な耕作地がないからこそ、ここにしかない名産品を生み出し、発信してきた。逆張りの戦略は、JICAが世界中で展開する「一村一品運動」の原点だ。

「壁」に囲まれた小さな町 裾野ははるか世界へ

高い壁に囲まれた町で、外の世界に憧れを描く少年エレン——人気漫画『進撃の巨人』の作者、諫山創さんが作品の構想を得た風景が、大分県にある。阿蘇山を水源とする大山川の流れに沿って、小

い挑戦のきっかけとなります。そのため、都会の人たちとの交流が大切なんです」と矢幡建治さんは強調する。現在は半分・福岡の両県の都市部に計9店の直売所を展開するほか、2001年には地元農産品を使って農家の人たちが料理を作るオーガニックレストランも開店し、大分県内はもちろん、隣接する福岡県や熊本県などからも多くの客が訪れている。

農村と都市の交流をさらに進める試みとして、昨年、開園したのが「五馬媛の里」だ。豊後国風土記に名を残す五馬高原の統治者の名を冠したこの場所は、五馬媛が祭られている玉来神社を頂点に、集会施設としての庄屋の家や古代米を育てる水田、梅や桜、スモモなどの木々を植林した山々などで構成される、よみがえった山里。大山町農協は、この場所を都会の人が季節の移り変わりを楽しみ、体験農作業にも挑戦できる「農業者のテーマパーク」として展開していく予定だ。

「昨年、あるイベントを予定していた日に雨が降ったのですが、イベント中止をお知らせしても、やりたかったと都会からわざわざ足を運んでくれる人が多かったんです。私たちにとって日常にすぎない農作業が、都会の人にとっては特別なことなのだ実感しました」と話すのは、五馬媛の里の運

さな田畑と山がひしめく日田市大山町。〴〵壁〴〵という表現にたがわぬ山のふもとから見上げると、迫りくる山影と、その向こうに広がる空のコントラストに圧倒される。

「大山町の農家1軒あたりの耕地面積は、平均40アール。しかも、一枚の田畑ではなく、10枚、20枚

営に携わる大山町農協の高瀬八郎さん。里では、木々を植えた山に遊歩道を作り、休憩所などを整備すると同時に、里のすぐ脇で今も耕作を続ける地元の人たちとの交流や、玉来神社を中心に受け継がれてきた伝統芸能、祭りなどの文化の継承も行っていく予定だ。

こうした活動の背景には、農村の過疎化に対する強い危機感がある。大山町は農家の収入向上を皮切りに、体験学習や国際交流などを通した人づくり、若者にとっても魅力のある暮らしやすい街づくりなどを積極的に展開してきた。現在600戸の農家は高齢化が進んでいるが、Uターンする若い世代や、就農を希望する都会出身の人々も少しずつ増えている。町の将来を担う若い人たちに対して、ただ空き家を提供するだけでなく、生活しやすい環境を作って定着につなげるのが狙いの一つだ。

高瀬さんは「人が離れた家に、そのまま新しい人を入れても、定着にはつながりません。新しい人がここに住み続けたい、ここで農業を営みたいと思う場所にしていかねければならないはずです」と強調する。

大山町農協が担うのは名産品のブランディングや販売網など、一農家の手には余る農業インフラの構築だ。そこに人が住み、田畑を耕すことで、経済が回り、地域が

大山町は切り立った山に挟まれた土地。平らな耕作地はわずかで、多くの果樹畑は傾斜地にある



地元の農家が数多くの「おもてなし料理」を提供するレストラン。平日も大盛況だ

活性化する。人々の交流の場を作れば、文化が栄える。〴〵壁〴〵に囲まれた小さな町が、その壁を乗り越えて世界をリードしていく。

という細長い耕作地が、切り立った斜面に点在しています」と説明してくれたのは、大分大山町農業協同組合の矢幡建治参事だ。40アールといえば、北海道を除く全国平均（1・55ヘクタール、2014年農林水産省調べ）と比較しても約4分の1にすぎない。狭い土地でどんな農業をすればいい



五馬媛が祭られる玉来神社



山を整備し、梅や桜などの植林を進める五馬媛の里。庄屋の家や玉来神社など、農村ひとつを丸ごと包み込む「農業者のテーマパーク」だ



庄屋の家は現在、集会所やイベント会場として使われている



一村一品運動